

『今月の天候と農作業』

通巻第5580号
6月号
平成27年 5月 28日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【九州南部1か月予報】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

【予報のポイント】

期間のはじめは気温が高く、向こう1か月の気温は平年並か高い見込みです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	40	40
降水量	九州南部	30	40	30
日照時間	九州南部	30	40	30

【概要】

平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率60%です。2週目は、平年並の確率50%です。

<1週目の予報> 5月30日(土)～6月5日(金)

数日の周期で天気は変わり、低気圧や前線の影響で雨の降る日があるでしょう。

※詳しくは、週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

<2週目の予報> 6月6日(土)～6月12日(金)

前線や湿った気流の影響で、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

<3週目から4週目の予報> 6月13日(土)～6月26日(金)

低気圧や前線の影響を受けにくく、平年に比べ、曇りや雨の日が少ないでしょう。

普通作物

◆ 早期水稲

1 追肥と水管理

コシヒカリの穂肥は、幼穂長が1匁頃に葉色により加減し行います。今年は平年より早く生育しているところもあるので、ほ場毎に良く確認します。なお田植時に一発肥料を施用した場合は必要はありません。水管理は根の活力を維持するため間断かん水を行いますが、幼穂伸長や出穂期にあるため落水は過度に行わないよう注意します。また生育が早い所は、幼穂が低温に遭遇する可能性も高くなります。気温17度以下になると障害を受けるので、気象情報に注意し、深水にして保温に努めます。

2 病虫害対策

穂ばらみ期と穂揃い期にいもち病対策を行い、カメムシは穂揃期とその7～10日後の2回は行います。早期水稲ではカメムシによる玄米検査等級の格落ちが毎年多く発生しています。薬剤散布の他、カメムシ繁殖場所の畦畔や周辺草地の一斉除草を出穂の2～3週間前迄に行うと有効です。また水田内のヒエやホタルイもカメムシを誘引するので早めに抜きましょう。

◆ 普通期水稲

1 代掻きと田植え

代掻き時の浮遊ゴミには紋枯病等の菌核があるので処分します。ヒノヒカリは白未熟粒が発生しやすいので早植えは避けますが、一方で晩生種の遅植えは出穂後に低温障害を受けるので注意します。田植時はいもち病やウンカ類の予防のために箱施薬を行います。田植え後の余り苗は直ちに処分します。

2 除草

除草剤はラベルの記載内容をよく確認して正しく使用します。ジャンボ剤やフロアブル剤は、水深が浅いと拡散不十分で薬害の恐れがあります。散布後7日間は掛け流しせず止水します。

(鎌田 博人)

施設野菜

◆ 収穫終了後の管理

今月でほとんどの施設野菜は栽培が終了します。次の栽培に向けて、ハウス内の害虫を死滅させてから宮崎型太陽熱消毒を行いましょう。

特に、きゅうりではアザミウマ類、トマトではコナジラミ類が媒介するウイルスによる被害が依然として見受けられます。

作物がウイルス病に感染すると、回復は難しく、草勢の低下等により収量は大幅に低下します。これらのウイルスを媒介するのは、ハウス内に生息するウイルスを保毒した昆虫で、これをハウス外に飛散させると、近隣の雑草に寄生し繁殖するため、次作への感染が懸念されます。ハウス内の作物残渣を持ち出す前に、ハウスを閉めきり蒸し込みを10日間程度行うなど、害虫を駆除した上で残渣を持ち出すようにします。特にウイルス病が発生したハウスでは、蒸し込みと合わせて周辺雑草の除草を実施しましょう。

◆ 夏秋果菜類の栽培管理

梅雨に入り曇雨天日が多くなるため、雨よけハウス栽培のきゅうり、ピーマン、にがうり等では、日照不足による草勢の低下や病害虫の発生が予想されますので、次の点に留意した栽培管理を行います。

①通路や畦間に滞水しないように、かん水は少量多回数で行う。ポリマルチ上に滞水した場合は速やかに除水する。

②着果負担を軽減するため、不良果を中心に摘果を行う。

③追肥は1回当たりの窒素分量を少なくし、窒素過多にならないように注意する。草勢が弱い場合には、葉面散布等により草勢の回復を図る。

④摘葉や整枝・誘引を適切に行い過繁茂を防ぎ、通風採光を良くする。

⑤換気を良好にし、葉の濡れ時間を短くする。

⑥集中豪雨等に備えてほ場の周りに排水溝を掘るなど、排水対策を十分に行う。

一方で、曇雨天が続いた後、急に晴れ間が出た場合など、葉やけやしおれが発生しやすくなりますので、日射が強い時に備えて、寒冷紗などで遮光できるような準備しておきましょう。

(黒木 正晶)

葉茎根菜類・いも類

◆ 共通（排水対策）

梅雨期を迎えます。畦や作物が冠水すると、根傷みによる生育不良や病気発生の原因となります。排水を促すため、ほ場内の周辺排水路や畦と直交の排水路を整備・点検し、確実に排水口につなげます。ほ場外の排水路の整備・点検も併せて行いましょう。

◆ かんしょ

トンネル栽培は収穫時期となります。収穫は、植え付け後100日目から可能となりますが、試し掘りを行い芋の肥大を確認してから収穫を始めます。植え付け後130日以上になると、皮色や形状が悪化しやすくなるので適期収穫に心掛けましょう。

◆ おくら

収穫期です。草勢が低下すると葉の切れ込みが深くなりますので、追肥や摘葉については草勢を見つつ行いましょう。

◆ さといも

トンネル栽培は収穫期となります。数株試し掘りを行って重量を計り、10斤の換算収量が1トに達したら収穫を始めましょう。

◆ ほうれんそう

高冷地栽培では、4月に播種したものが上旬より収穫期を迎えます。収穫時に緑が濃くて葉肉の厚い状態にするため、収穫予定の7～10日前から灌水を控えます。また、収穫後は直ちに次作の準備に取りかかります。降雨も多くなり、べと病の発生しやすい環境となりますので、抵抗性品種を利用しハウス内の通風を良くしましょう。

◆ らっきょう

中旬までには収穫を終えましょう。土壌水分の多いときに収穫すると球の光沢が劣り、腐敗の原因となりますので、晴天の続くときに収穫しましょう。

自家採種をする場合は、球が完全に肥大充実してから掘り上げますが、萎縮、黄化症等の生育不良株は注意して除きます。掘り上げた球は陰干し後、ネットに入れて涼しい場所で保管します。

(杉村 幸代)

果樹

1 常緑果樹

◆ 温州みかん

今年の着花量は、平年並みからやや少ない傾向が見られますが、開花期以降の低温傾向を受けて、生理落果が少ない樹が多く見られます。結果数の多い樹では、6月中旬から、小玉果や内成り果を中心に荒摘果を始め、中玉以上の果実生産を目指しましょう。

◆ かんきつ全般

雨が多くなり、黒点病の防除が特に重要になってきます。1回目の薬剤散布から300mmの降雨があると薬剤の効果がなくなります。250mm程度の降雨があったら次の薬剤散布を行いましょう。

6月はカイガラムシの発生が始まる時期です。上～中旬に薬剤散布を行い、密度を減らすようにしましょう。

◆ 完熟きんかん

1番花の安定した結果は大玉生産と早期出荷を同時に実現できます。出蕾期から開花期の加温や満開期のビニル被覆を実施し、1番花の結果を促進しましょう。

◆ マンゴー

日焼けや高温防止のための過度の遮光は、着色不良や糖度の低下を招きます。遮光ネット等のこまめな開閉により、十分な日照を確保しましょう。栽培期間中の過度の節水は、糖度低下や樹勢低下を招きます。定期的なかん水を実施しましょう。

収穫が終わった施設では、剪定等の作業に入りましょう。樹齢の進行と共に、着花が不安定になったり、果実品質が低下している園では、改植を行いましょう。

2 落葉果樹

◆ くり

夏肥の施用を必ず行いましょう。特に、樹勢が落ちたり果実が小さい園での施肥は効果的です。また、翌年の結果母枝充実にも有効です。年間施肥量の2割程度を施用しましょう。

(山口 和典)

花き

◆ 夏秋ギク

曇雨天が続いた後の晴天日には「葉焼け」の発生が多くなりますので、気温の低下を図るとともに、循環扇によるハウス内の送風やカルシウム資材の散布、葉水をうつ等の対策を実施してください。「フローラル優香」の8月出荷作型については正常な開花を促進するため、消灯後からシェード（12時間日長）を2週間程度実施してください。また、貫生花の発生を軽減するために、過剰な施肥は控え、適切な栄養生長期間を遵守しましょう。「精の一世」は6月10日前後が8月盆出荷の消灯日になります。消灯後に高温に遭遇すると開花が遅れますので、夜間はシェードを開放し、昼温も換気を十分に行いましょう。

◆ 秋ギク

白さび病等の病害は健全な穂での親株育成、親株ほ場での予防の徹底、適切な農薬の選択等の対策をとり、本ぼへ持ち込まないようにしましょう。農薬の選択については地域の技術員に必ず相談してください。

◆ デルフィニウム

夜冷育苗は早期抽だいを防止するため、鉢上げ後から16時間、10度の夜冷を行ってください。セル用土及び鉢土の乾燥や過湿は生育不良や徒長の原因になりますので、生育に合わせた細やかなかん水管理を実施してください。

◆ ホオズキ

7月盆出荷作型での着色のためのホルモン処理の時期です。ホルモン剤散布はできるだけ涼しい早朝に実施し、散布前後数日は寒冷紗により遮光します。ホルモン剤散布と他の農薬の近接散布によって色ムラや薬害が発生しやすくなりますので、高温時には換気を徹底して、高品質ホオズキの生産に努めましょう。

◆ シキミ

梅雨時期は黒シミ斑点病の感染の恐れが最も多い時期です。病害虫による被害は商品価値を低下させますので、適期防除に努めましょう。

また、シキミは特に湿害を受けやすい作物ですので、梅雨時期の排水対策を徹底してください。

(中村 広)

畜産

◆ 家畜

梅雨入りとともに湿度が急激に上がります。畜舎への風の通りを良くし、畜舎内へ雨が直接降り込まないようにしましょう。子牛の下痢対策では、敷料のこまめな交換が効果的です。下痢が発生している子牛に接触した場合は、他の子牛へ下痢が蔓延しないよう隔離するとともに、長靴を交換し手指を消毒するなど人を介して移らないよう気をつけましょう。

乳牛に関しては、1日を通して暑熱ストレスを受ける時期になります。ヒートストレスメーターの温湿度指数（THI）を毎日チェックしましょう。牛舎ファンを常に回し、牛体に1頭1頭に直接風が当たるようにします。牛は水を大量に飲むからエサを大量に食べれる動物です。いつでも新鮮な水が飲めるようにしてください。また子牛にとっても水は大事です。子牛用のバケツなどで飲水させる場合は水の交換をこまめに行いましょう。

豚・鶏では、梅雨の晴れ間の急激な気温上昇で熱射病の多発が懸念されます。寒冷紗の設置で直接日光を遮り、換気扇やダクト、あるいはミスト機による散水で畜舎内の温度が上昇しないようこまめにチェックしてください。

◆ 飼料作物

サイレージも腐敗しやすい時期になります。サイレージの色が黒っぽかったり、手で触って熱く感じる場合、いつもと匂いが違う場合は要注意です。絶対給与しないでください。

長雨による排水不良は、湿害などにより飼料トウモロコシなど作物の生育を阻害します。ほ場周辺に排水溝を設置し、ほ場内に水が貯まりにくいようにします。

(須崎 哲也)

特用作物

◆ 茶

1 二番茶の摘採

二番茶の摘採期は降雨が多いため、雨の影響を考慮しつつ摘み遅れのないよう適期摘採に努めます。

樹勢の強い茶園は、摘採前に7日間ほど黒寒冷紗等で被覆し品質向上を図ります。被覆により、黒葉腐病・葉擦れ・葉焼け等が発生し易いので、生葉品質の低下に注意します。

2 摘採後の管理

二番茶摘採後の整枝は、摘採の7日後頃に遅れ芽を除く程度で摘採面を整えます。本年は、炭疽病多発のため地区防除基準に準じ速やかに防除を行います。

深刈り更新は、二番茶後できるだけ早く、古葉が残らない高さで実施します。また、一番茶後に中切りを行った園では、中切り55～60日後に中切り面より3㍍程高い位置で1回目の整枝をします。

施肥は、二番茶摘採前後に地区施肥基準に準じ速効性肥料を施用します。

3 チャトゲコナジラミの発生に注意

次の要領で茶園を観察し、チャトゲコナジラミ発生の有無を確認します。なお、本虫に対する問い合わせや、見慣れない虫を発見した際は、最寄りの農業改良普及センター等関係機関へ連絡します。

- ①成虫は新芽に群がるので、茶園では新芽を観察する。
- ②茶園のうね間にあるクモの巣などを観察する。
- ③摘採袋や製茶工場の生葉コンテナ周囲を観察する。

(黒木 清人)

◆ しいたけ

1 伏込み地の管理

しいたけ菌は、30度を上回ると菌糸生長が急激に減退し、35度以上では死滅する恐れもあります。直射日光によるほだ木の温度上昇を防ぐため、日陰が十分でない箇所には笠木等を補充しましょう。

2 ほだ場の管理

害菌の侵入を予防するため、梅雨に入る前に防風ネット等の撤去や周囲の雑草木の刈払い、除伐等を行い、風通しを良くしましょう。

また、倒れたほだ木や廃ほだを整理し、害菌・害虫の発生源にならないようにしましょう。さらに、しいたけ採取後のほだ木は、今後均一にしいたけを発生させるためにも、ほだ回しや天地返しを行いましょう。

(吉行 浩太郎)

◆ たばこ

今月は、中葉系の収穫・乾燥が主な作業となります。

1 収穫は、適熟葉収穫に努め、取り遅れや収穫ロスをなくし、完全収穫で収量確保を図りましょう。また、立枯病などの病害葉はクジリ取りを行い区分収穫に努めましょう。

1 収穫葉にマルチ片や土砂が付着している場合には除去しましょう。

また、取り下ろし時にも異物が混入しないように心掛けで作業しましょう。

3 梅雨入り前には、ほ地の排水対策や環境設備に心掛け、耕種的病害防除を徹底しましょう。また、農薬を使用する際には、使用基準を守り、野帳・使用実績票へ記帳しましょう。

4 乾葉の取り下ろし時には、吸湿・過乾に注意して荷造りを行いましょう。包を貯蔵する際には、たばこ以外の臭いを有する物を避けて貯蔵しましょう。また、虫害の被害を受けないよう全包ビニル梱包を行いましょう。梱包の際は水分に気をつけて、口を養生テープ等で閉じて貯蔵しましょう。

(松元 貴光)

施設園芸農業者の皆様へ

自然災害等で被災した園芸用施設を再建し、速やかに経営が継続できるよう、平成27年2月から、NOSA Iの園芸施設共済の補償が拡充されました。拡充の概要は、次のとおりです。

①施設本体と附帯施設（カーテン装置等）の耐用年数が見直され、本県の沿海地域に多いAPハウス（簡易鉄骨ハウス）が7年から14年に、中山間地域に多いパイプハウスは5年から10年にそれぞれ延長されました。

②施設本体と附帯施設の補償割合が見直され、補償金額が増加します（耐用年数経過後が20%から50%に引き上げられました）。

③先述の補償の拡充に加え、農家の選択により、耐用年数内は施設の再建築価額の100%、経過後は再建築価額の75%までの補償が可能になります（ただし、追加部分の共済掛金には国庫負担はありません）。

④全施設が、撤去に要した費用を補償できるようになりました（農家選択）。

施設園芸農業者の皆様、台風をはじめとする自然災害等に備えて、災害対策の基本となる園芸施設共済に加入しましょう！

詳しくは、最寄りの農業共済組合へお問い合わせください。

(農政企画課農協農済担当)

内容の詳細について

6月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう1ヶ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稻	葉いもち 穂いもち	並 —	5月中旬に、県内で葉いもちの発生が確認されました。常発地や迫田等の風通しの悪いほ場では、特に注意が必要です。 今後梅雨入りとともにいもち病がさらに発生しやすくなるので、早期発見に努め、病斑が認められたら速やかに液剤等で防除します。
	斑点米カメムシ類	—	斑点米の混入が極少量でも米の等級に影響するため、例年被害の発生する地域では必ず防除を行います。防除適期は穂揃い期とその7～10日後で、2回防除を行うと効果が高くなります。
普通期水稻	葉いもち	—	補植用の置き苗は、いもち病が発生しやすく、また、伝染源となるので早めに処分します。
	スクミリンゴガイ	—	水田の水口に金網を張り、貝の侵入を防止するとともに、生息数が多い場合は捕殺するか粒剤による防除を行います。
野菜・ 工芸作物	アブラムシ類 ハスモンヨトウ	やや少 並	アブラムシ類は、キュウリモザイク病やタバコ黄斑えそ病などのウイルス病を媒介しますので、早期発見に努め防除します。
施設野菜 ※	土壌病害虫 コナジラミ類 アザミウマ類 アブラムシ類	—	近年、微小害虫によって媒介されるウイルス病（黄化えそ病、黄化葉巻病、モザイク病など）が問題となる事例が発生しています。 次期作の発生源になりますので、栽培終了後は株を抜き取り、少なくとも10日間は施設を密閉し、媒介虫を死滅させてから残さを処分します。また、ほ場周辺の除草も徹底します。 防除情報を発表していますので防除の参考にしてください。
いちご ※ (親株)	炭疽病 ハダニ類	—	親株から採取した葉を検定した結果、感染ほ場率は過去10年間で5番目となっています。 親株における本病の検定に努め、感染が確認されれば適切に処分するとともに、健全な親株への定期的な更新に努めます。 発生面積率、寄生株率ともに過去10年間で最も高くなっています。親株から苗に移行・増殖するので防除を徹底します。
果樹全般	果樹カメムシ類	やや多	県内3か所に設置しているフェロモントラップでは、チャバネアオカメムシが平年より多く誘殺されています。多飛来を見てからの防除では手遅れとなるので、園内外を見回り、早期発見、早期防除に努めます。 特に、ウメやナシなどの結実中の果樹類では注意が必要です。
カンキツ (露地栽培)	そうか病 かいよう病 黒点病	並 並 やや多	黒点病は、その感染源である枯れ枝の除去に努めます。また、剪定枝をほ場周辺に放置していると、激発するおそれがありますので適切に処理します。
	ミカンハダニ ミカンハモグリガ アブラムシ類	並 並 並	ミカンハダニは生息密度が高くなると防除が困難になるので、寄生葉率30%または1葉当たり虫数0.5～1頭を目安に防除を行います。
茶 ※※	炭疽病 カンザワハダニ チャノコカクモンハマキ チャハマキ チャノホガ ※ チャノミドリヒメヨコバイ チャノキイロアザミウマ クワシカガラムシ チャトゲコナジラミ	やや多 並 並 やや多 並 やや多 並 並 —	炭疽病の発生が多く注意報を発表しています。 新芽生育期にチャノミドリヒメヨコバイに被害されると減収、品質低下が著しいため、萌芽期から開葉初期に薬剤散布を行います。 チャノコカクモンハマキの防除適期は、発蛾最盛期の7～10日後で、チャノコカクモンハマキとチャハマキの発蛾最盛期の差が10日以内であれば同時防除が可能です。 チャノキイロアザミウマの発生は、例年二番茶期から多くなります。多発生してからでは防除が困難になるので、早期発見、早期防除に努めます。 チャトゲコナジラミの成虫は新葉、幼虫は下位葉裏で発生が多いため、定期的に観察し早期発見に努めます。

- 1) ※※は注意報、※は防除情報を発表しています。
- 2) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。
- 3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnn.ne.jp/miyazaki> です。